

長 崎 の 教 材 化

江 口 勇 治*

上記のテーマについて、筑波大学社会科教育学会月例研究会（6月2日）で、発表する機会をいただきました。長崎大学教育学部で、7年間教鞭をとり、そこに生活していたため、そのなかから、自分自身の研究を、ある程度限定せざるをえませんでした。

不十分な発表でしたが、私の提起した内容は次の二点だろうと思います。すなわち、

1. 教師や子どもといった学習者の眼（教材化する側の視点）ばかりでなく、地域という学習対象とされる場所の眼（教材化される側の視点）も大切にするために、どのような試みを行ってきたか。
2. 地域を中心に、教育課程を構想できないか。

の二点です。

1. に関して、社会科として3年ばかり県内の地域教材の開発に、取り組みました。たとえば、長崎市の事例として、「しっぽく」という長崎独自の郷土料理や「ペーろん」という地域の祭りや「坂と市民生活」という長崎の地形的特徴とくらしなどの単元開発を行ってきました。そして、これらの教材化の過程で、「地域の具体性」と「学習者の想像力」という二面をできるだけ、生かす方向を模索しました。

こうした一連の流れのなかから、教科を越えて長崎（長崎県）という地域を、いわば「まるごと」教材化できないかと考えるようになりました。その結果が、大学の教科教育（理科、家庭科、道徳、教育工学）の同僚との共同研究であり、「水際」という概念の提出でした。教科を越えて、地域を生かす道の一つが、社会科では当然視されている「地域の文化や歴史の認識に込められた過剰なまでの人間的な尺度」を払い落とした、「水際」といったごく当たり前の日常的リアリティの確認だったのです。結局、長崎という地域の「まるごと」が「水際」であり、その概念から導きだされる一々の事実を、教材化してみてもはどうだろうかということでした。

こうした構想に基づいて、2.に関して、ささやかながら共同研究者たちと一緒に本を出しました。（長崎大学教育学部教科教育学研究会著；水際教育と生活科、大日本図書出版、1990.8.）

* 筑波大学教育学系

残念ながら、教科の枠を完全には越えられませんでした。が、ご一読いただければ、幸いです。

以上のようなことを、当日の発表では提起しましたが、「水際」という概念の不正確さやそうした地域のラベリングの妥当性に関して、貴重な意見をいただきました。私自身、それらに明確に答える用意ができていませんので、その解答は、今後住もうとする“茨城”の対象化・相対化の作業課題に譲られていくだろうと思います。単なる願望になるかも知れませんが、“茨城”も「まるごと」教材化できないだろうかと考えています。